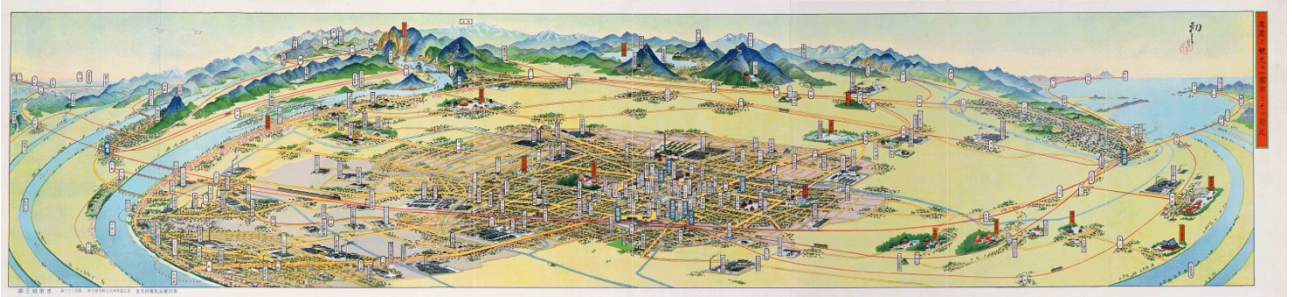


「起・機業コミュニティ」の寓話  
(断章“ノコギリヤネのある風景”その4)



▲ 吉田初三郎「産業と観光の一宮市とその附近」(1934/昭和9年)

東海道宮宿と中山道垂井宿を結ぶ美濃路。起宿は、尾張と美濃の境になる木曽川沿いに位置していた。周辺の村々と宿役を担っていた起村は、起町(1896年)となり、その後、隣接三村と合併する(1906年)。

この小さな農村の集合体である起町は、やがて尾張が毛織王国と呼ばれる礎を築いた。毛織物業を先導する組合、会社等の組織化、一宮と結ぶ鉄道の敷設、産業人を育成する町立学校の設立、従業者に食事を提供する共同炊事事業などを展開する。戦後の合併で尾西市となる(1955年)までのほぼ半世紀間、自治体であり、機業の事業体でもあった起町を「起・機業コミュニティ」と名づけたい。

起町のように、日本各地で産業が振興されていた時代、「大正の広重」と呼ばれた絵師が、時代の風景を描いていた。その名は、吉田初三郎(1884~1955)。鳥瞰図という方法で、空から俯瞰した都市の姿を描いていた。

初三郎は、一時期、犬山に画室を構えていたこともあり、一宮はじめ尾張各地の鳥瞰図を幾つか描いている。産業振興とともに、鉄道の発達によって、「観光」という新しいテーマが浮上してきた時代でもあった。

「眼」となって、時を超えて、空から「起・機業コミュニティ」を眺めてみようと思う。そして、ノコギリヤネの未来を展望してみたい。

ノコギリアン(神奈川県藤沢市在住/一宮市今伊勢町出身/時々、のこぎり二に出没)



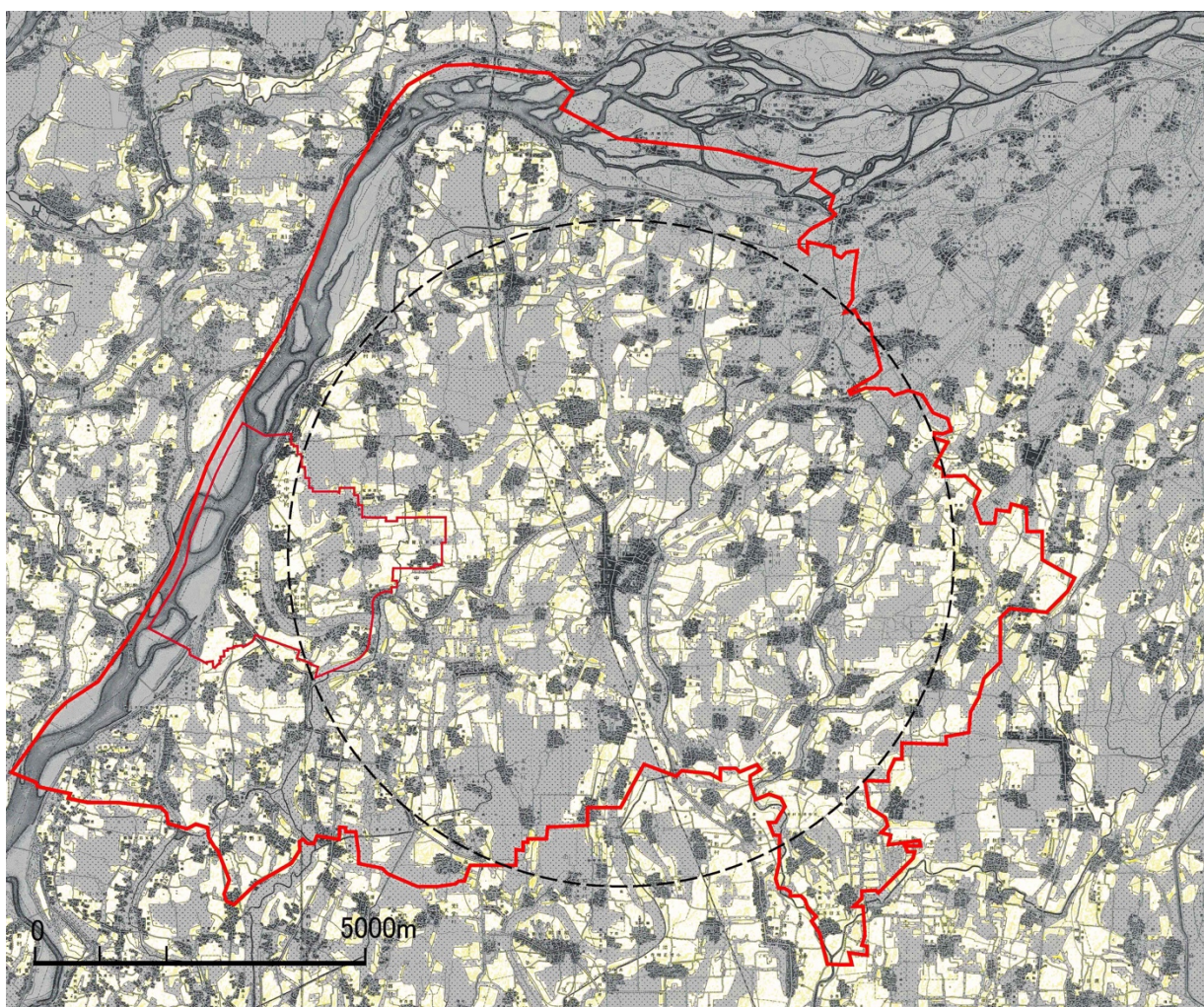
## 1. カラスとトンビ

眼下には、白雪のごとく綿花の実った大地が広がっている。

尾張平野では、徳川の時代に入ると、麦作のあとに生綿（コットン）が作られるようになる。農家は収穫してそのまま売るか、あるいは農閑期の副業として綿糸に紡ぐ。旧盆が終わると、綿や綿糸の小買商人たちが一宮から四方へ買い出しに出かけ、夕暮れには山のように仕入れて戻ってくる。その有様から、四周を荒らして黄昏時に帰巢する真清田神社の森のカラスになぞらえて、“一宮がらす”のあだ名がついたという。

一方、カラスに対して、起トンビ、津島トンビという言葉が名古屋あたりで言われたという。木曾川、笠松、岐阜などの地名が付されることもあるが、時代が下って、ガチャ万時代の景気の良い機屋を称したとも言われる。カラスとトンビが獲物を取り合うさまになぞらえた中央の商人と郊外の農家・機屋の攻防が、「お金」をめぐるこの地方特有のリアリズムと符合する。

しかし、一面の白い綿花畑の風景は、明治 24(1891)年に起きた濃尾地震で、一変することになる。地層の変化の影響か、その後、綿花栽培は全くの不作となる。大地動乱。それが毛織物業への転換を促すことになる。その起点となったのが、まさしく「起」であった。



▲白い綿花畑のイメージ（1890年頃の畑地分布／白い部分）



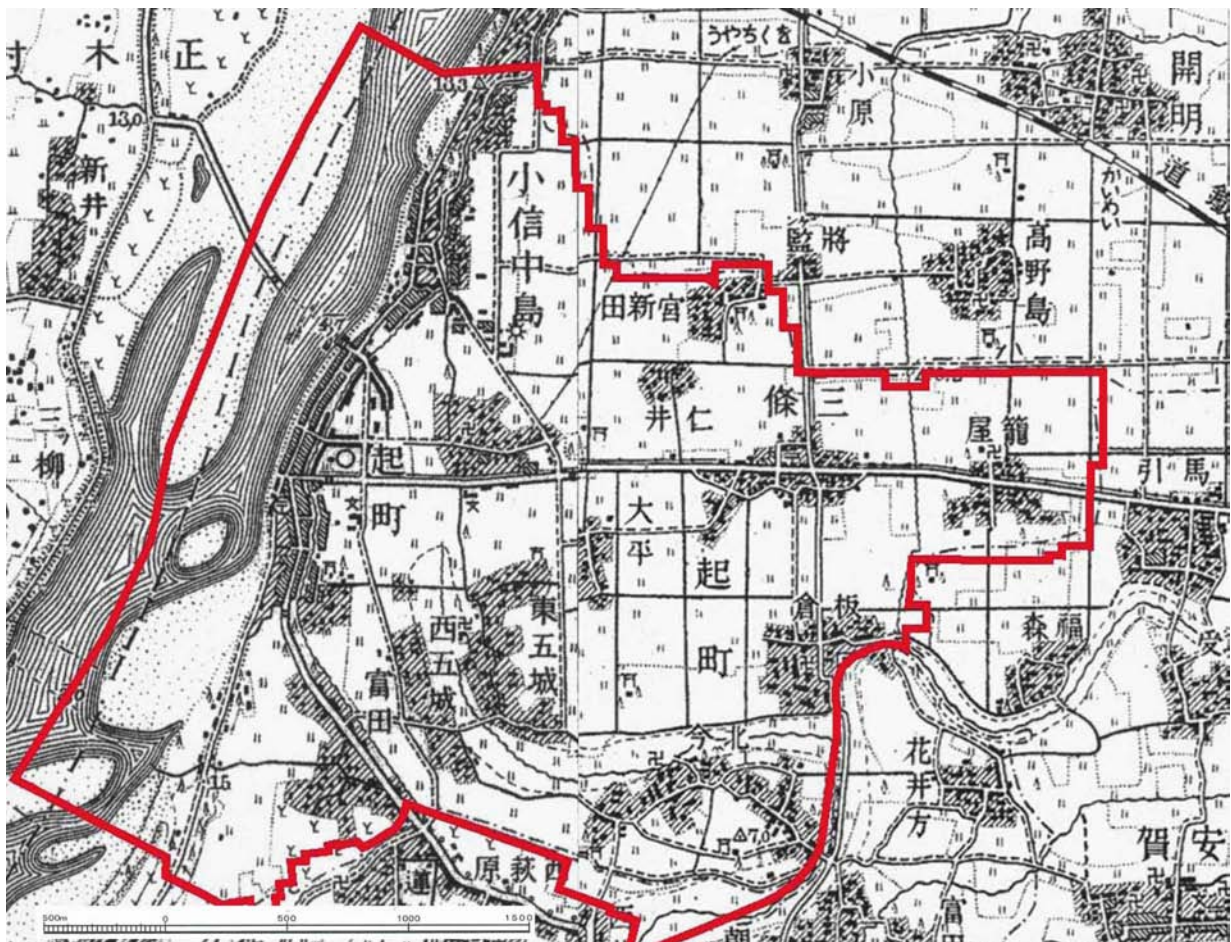
## 2. ノコギリヤネの夢見る少女

濃尾地震後、安い輸入綿の影響もあり、尾張地方の伝統的な綿作が消滅する。これを契機に、機業家の関心は、国内需要の高まる毛織物に移行した。第一次世界大戦（1914～18）で毛織物の輸入が途絶え、洋服向けの毛織物の生産に向け、起を中心とした機業家たちは、大阪の商社・芝川商店等の支援を得て、広幅織機の国産化を成し遂げる。「起・機業コミュニティ」の始まりである。

都市計画の父と称された石川栄耀は、昭和の初め、一宮市の都市計画立案に関与し、一宮周辺の農村に“工村”の姿を見出している。そもそもこの地方の機織業の隆盛は、度重なる木曽川の氾濫に起因している。江戸初期、堤防築造により土地を失い農業ができなくなった人々が、諸国に出向き、絹織りの技術を学んで帰り、機織を始めたという。「絹屋起（きぬやおこし）」と呼ばれる。以来、農家の副業（農間稼ぎ）として機織が広がる。“工村”の誕生である。

時代は大正初期。屋根の上で本を読む少女と言葉を交わした。

「知ってる？ のこぎり屋根には“オニ”がいるのよ。そのオニが逃げ出すとそのイエは潰れるらしいの。この屋根の上にいると、好景気後の反動で破産するコウバからオニが逃げていくのをよく見るの。オニってね、小さいの。みんな悲しそうな目をしているわ。女工さんや家族たち、みんなの苦しみを背負っているのかな。わたしは、屋根の上から遠くを見るのが大好き。このイエを出て、木曽川よりもっと先、海のはるか向こうの外国に行くつもりよ」



▲起・機業コミュニティ／大正9年（1920）頃



### 3. ガチャ万の行方

昭和初頭から統制が始まる。開戦、やがて終戦。起は幸いにも戦災を免れた。

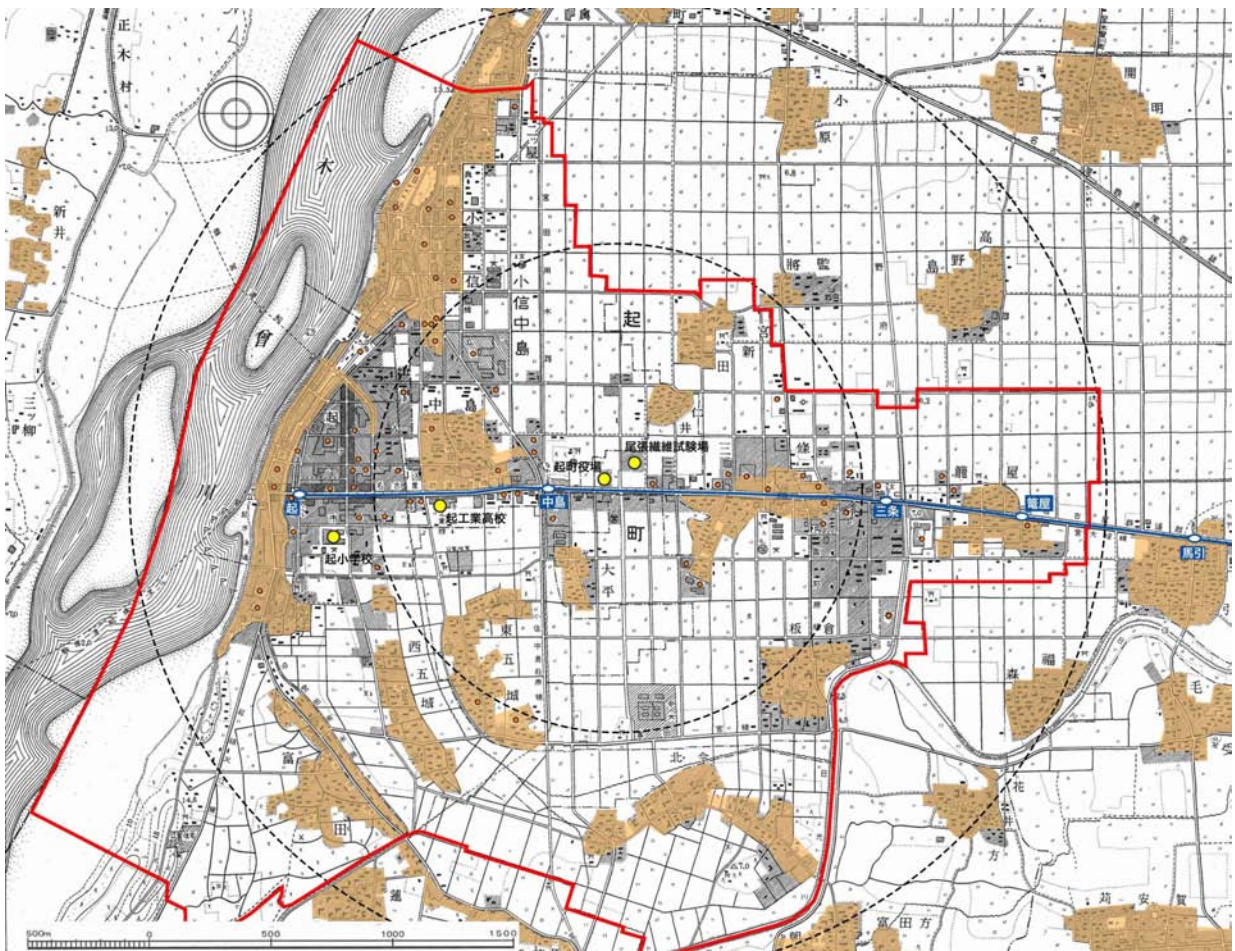
繊維産業は、終戦から5年後（1950年）の朝鮮戦争特需によって、全国でガチャ万景気を迎える。日本は、戦後復興から高度経済成長時代へと突入していく。

毛織業の尾張西部も例外ではない。長者番付全国第1位を輩出するほどであった。農地解放で土地を得た農家には、一部を売却して織機を購入し、織物業を始める人たちが出てくる。さらに新幹線や名神高速道路建設に伴う農地売却も加わる。そして、当然のように過剰事態を招く。1950年の1年間に、尾西毛織工業協同組合の登録織機は約4,000台から約6,000台まで増加したという。また、1955年における一宮市と尾西市を合わせた毛織物業工場1,529のうち、従業員が3人以下の工場は515であった。三分の一が、家族経営による小さな“コウバ”であった。

コウバの新築現場が見える。大工たちの話し声が聞こえてくる。

「一回ガチャンとやって一万円の儲けと聞けば、みんなやりたいわな。田んぼ二反で機械一台、一反でコウバー棟らしいわ。どうせ、タダ同然で貰い受けた土地も多いやろ」

「上から見てみやあ。あっちも、こっちも建てとるわ。そりゃ、カトーキョーソーになるて。まあ、ワシらは仕事になるからええけどな。ほれ、トンビが笑っとるがや。ピーヒョロやて」



▲ガチャ万時代の起町／昭和30年（1955）頃



#### 4. 「起・機業コミュニティ」の寓話

「ガチャ万」、「一宮がらすと起とんび」から、一宮市がかつて「織物のまち」として繁栄していたイメージを連想できる世代は、四十代半ばまでだろうか。同時に、自虐的ともいえる屈折した（ねじれた？）プライドが付帯することを。その背景には、第一次大戦後の戦争景気、朝鮮戦争特需によるわか成金的なイメージへのてらいがあるのかもしれない。

尾張西部の小さな農村に始まる「絹屋起」の機業が、農家の副業として、絹、綿、毛織へと時代・状況の変化とともに形を変えながら続き、小さな村落が協力して「まち」をつくった。組合を設立し、鉄道を引き、機業を担う人を育成する学校を設置し、人々が遊び、集う場所をつくっていった。「起・機業コミュニティ」の光り輝いた時代と言えるかもしれない。

三岸節子の幼少期、明治時代の終わりの旧起宿界隈は「日常の必要物資はここで調達され、幼児の私にとってはまばゆいばかりの都会を感じさせた場所」であったという。その後、起の町の賑わいは、行政区域の拡大とともに東に移動していくが、機業の衰退とともに賑わいは消えていった。「まち」の風景が、色あせていく。

ノコギリヤネの上から、少女（ノコ上の少女）の目には見えていたのかもしれない。ノコギリヤネに閉じ込められるイエと共同体の姿が。“ノコ上の少女”の言葉が予言めいて聞こえてくる。

「オニって小さいでしょ。目ざとい鳥に狙われるの。トンビやカラスがよく奪い合っているわ」



▲色あせていく「起・機業コミュニティ」（左：戦後、右：戦前）



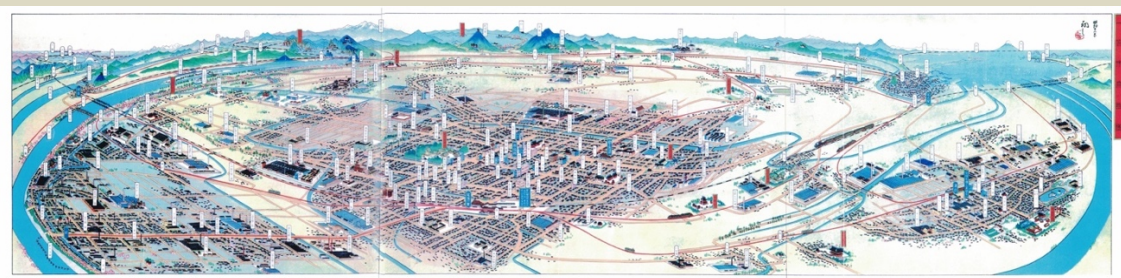
## ●インターミッション：一宮とその周辺鳥瞰図いろいろ（吉田初三郎）

初三郎は、昭和9年、同12年、同27年に、一宮を中心とした鳥瞰図を描いている。戦前の二つの絵では、起や津島など周囲の機業地や町も描いているが、戦後は、一宮市の中心部に焦点をあて、起などの郊外地は主要な工場が描かれている。

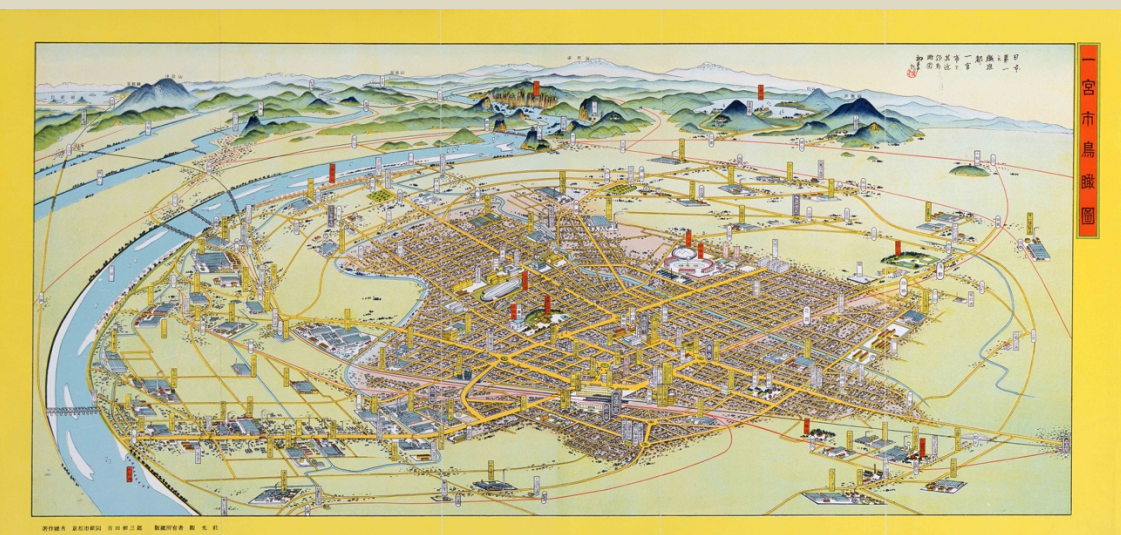


① 産業と観光の一宮市とその附近（1934／昭和9年）

（出典：一宮市観光協会 <http://138ss.com/city-map/chyoukanzu/index.html>）



② 一宮市鳥瞰図（1937／昭和12年）

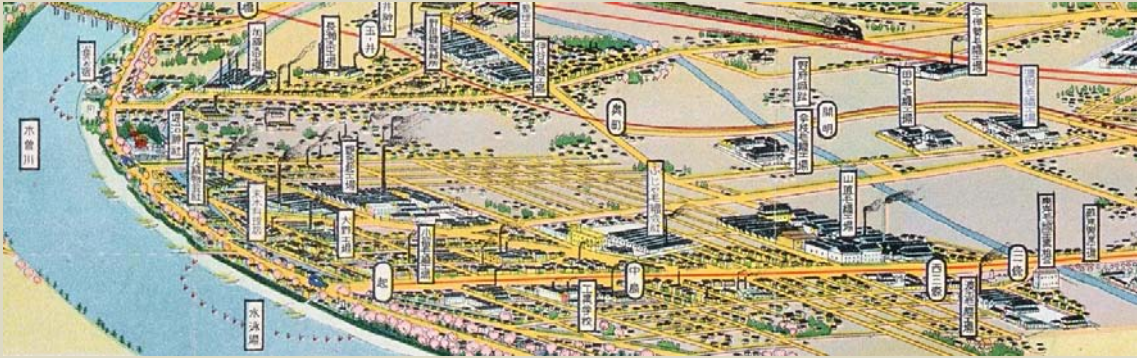


③ 繊維都市一宮市とその近郊（1952／昭和27年）

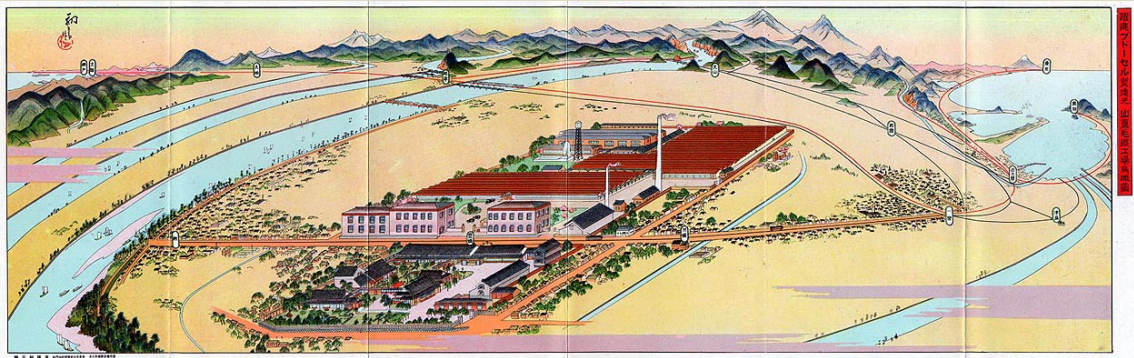
（出典：一宮市観光協会 <http://138ss.com/city-map/chyoukanzu/index.html>）



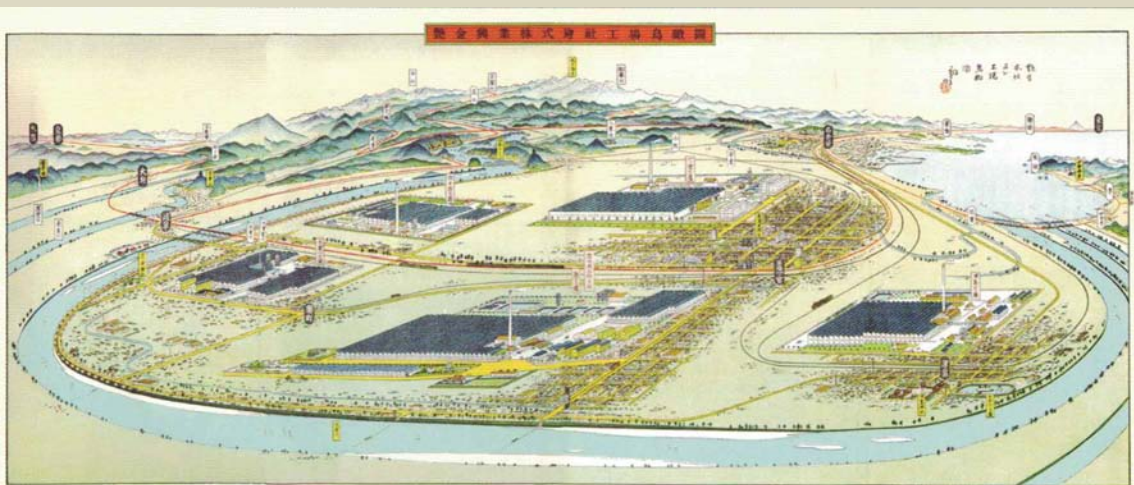
また、⑤山直毛織と⑥艶金興業のように、尾張の毛織業を担った特定の企業を抽出して、鳥瞰図に落とし込んだ企業PR的作品もある。



④ 起町付近の拡大図「産業と観光の一宮市とその附近」(1934/昭和9年) 左下部分



⑤ 躍進ブドーセル 製造元 山直毛織工場鳥瞰図 (1935/昭和10年)  
(出典:「ウールの尾西」一宮市尾西歴史民俗資料館 特別展図録 No.71)



⑥ 艶金興業株式会社工場鳥瞰図 (「毛織と艶金」昭和28年)  
(出典:「のこぎり屋根と毛織物」一宮市尾西歴史民俗資料館 特別展図録 No.85)

(後半へ)



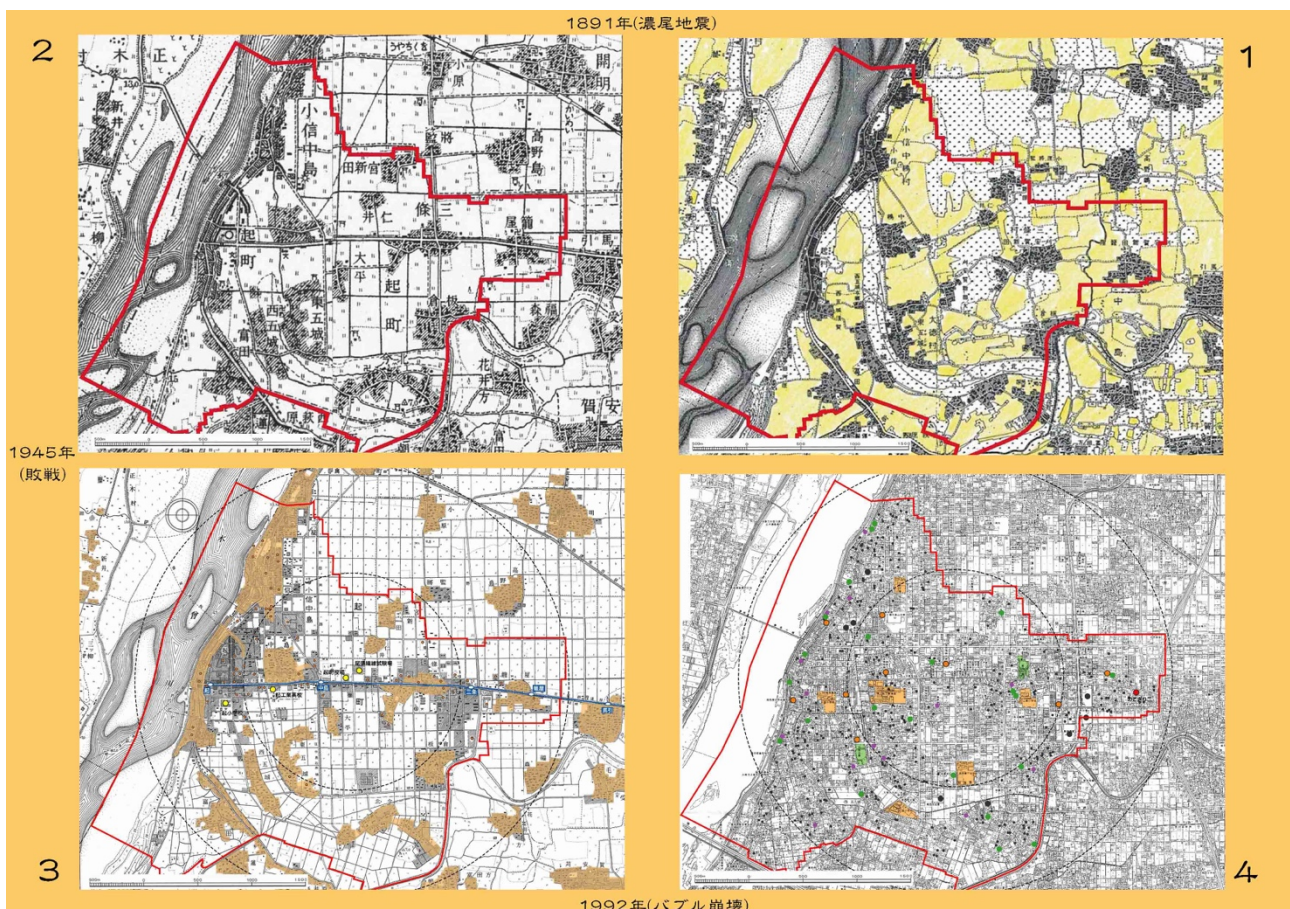
## 5. 「起・機業コミュニティ」を超えて

「起・機業コミュニティ」の時代は、濃尾地震後、起を起点に尾張西部の機業が綿から毛織へとシフトし、太平洋戦争を挟み、朝鮮戦争特需で復興し、高度成長を経験、やがてバブルが弾けるまで、日本経済と呼応して毛織業の盛衰を担ってきたおよそ100年といえるだろう。

それは、日本全国で工業開発が推し進められ、農業から工業へと産業構造が転換する工業化・都市化の時代であった。そして、いま、バブル崩壊からほぼ30年が経過しており、工業からの産業構造転換の必要性がうたわれて久しい。人口は2015年にピークを迎え、高齢化率（65歳以上人口）は30%に近づいている。ポスト工業社会、反都市化の文明史的転換期にある。

この国の多くの「都市」は、工業社会によってつくられた。戦後、急激に増える人たちの生活に必要な「もの」を生産し、消費するために都市をつくり、ひと・ものが交錯する場として「まち」をつくってきた。そして、工業の衰退とともに、まちも存在価値を失っていった。起、一宮のまちがまさにそうである。都市は、農地を潰し、無秩序に拡大してきた市街地を残した。

しかし、工業社会、その母体となった農村共同体と無縁の世代は、ノスタルジー色を纏ったかつての都市やまちを必要としない。彼ら・彼女らは、“自分のまち”をつくるだろう。「のこぎり二」のように、新たな「起物語」を携えて。



▲起機業コミュニティ・クロニクル



## 6. 残ってしまったノコギリヤネという現実

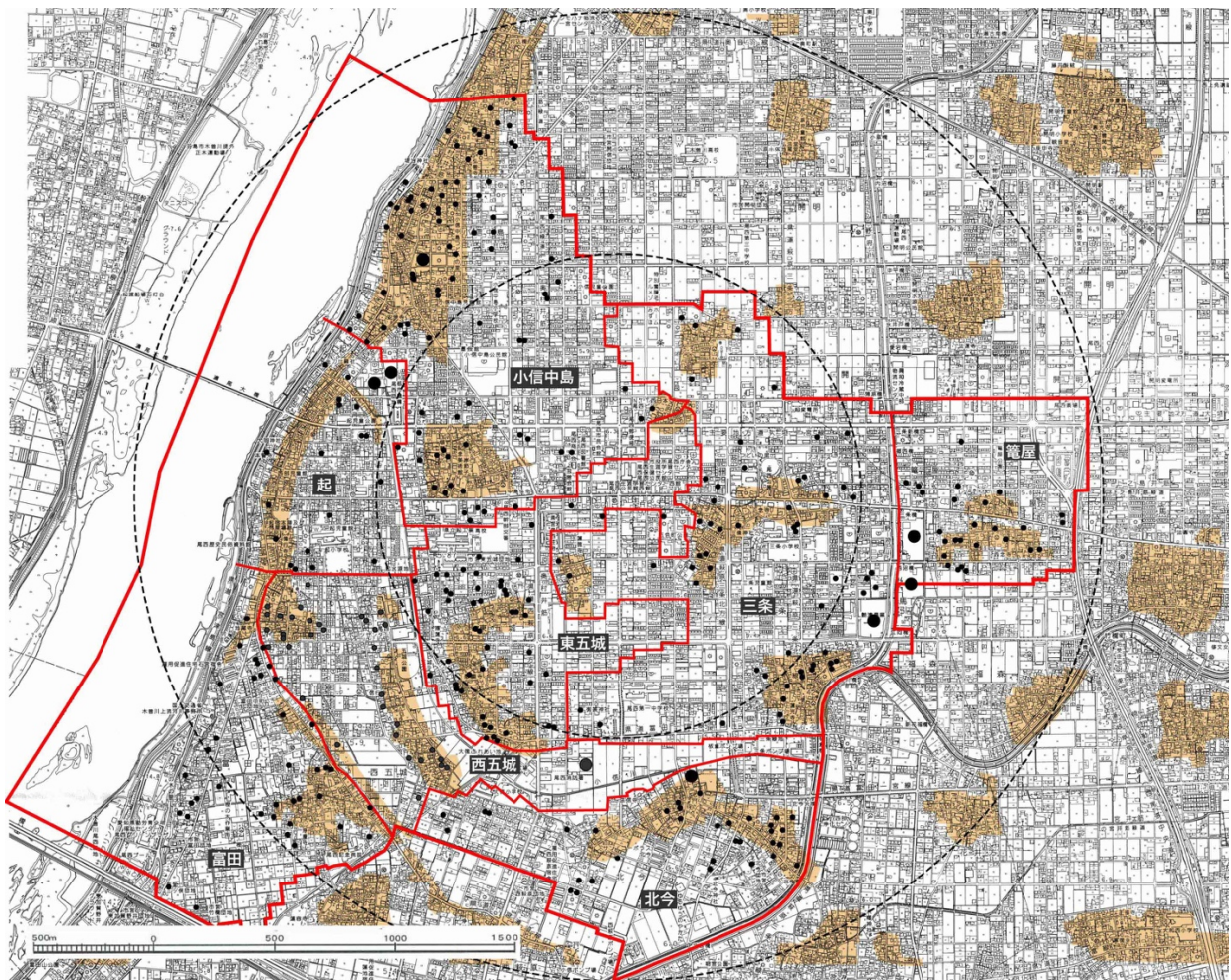
ノコギリヤネは、「起・機業コミュニティ」の生き証人である。一宮市の鋸屋根建築物を調査した尾張のこぎり調査団（2010年時点）によれば、起地区については、地区の半分ほどが未調査ながら、最も多くの469棟のノコギリヤネが確認された。

それから10年経過したいま、起にいくつのノコギリヤネが残っているだろうか。グーグルマップから、349棟を検出することができた。内訳は、起：20棟、小信中島：87棟、三条：58棟、簗屋：28棟、東五城：48棟、西五城：36棟、北今：34棟、富田：38棟。

字別では、集積の多かった起、小信中島の消滅が著しいようだ。象徴的存在であった升善毛織がなくなったのは1年半前。まだ、記憶に新しい。旧美濃路からは、ノコギリヤネの街並みは消えてしまった。このうち、現役で機業を営む工場はいくつあるのだろうか。

ノコギリヤネは、「残ってしまった」のかもしれない。いまだ世界有数の毛織の生産地として、機業の継続は可能である。古い織機が付加価値を生んでいる。また、後継者が途絶えて廃業しても、取り壊し費用、跡地利用の収益などを考慮して、そのまま物置、倉庫として使う方が合理的なのかもしれない。だから、残ってしまった。そして、その価値も見えなくなった。

「起・機業コミュニティ」は、江戸時代から続く農村共同体（下図のオレンジ色）をベースとしていた。そこに残るノコギリヤネに、“自分のまち”を描くことの可能性が見えてくる。



▲起ノコギリヤネマップ



## 7. ノコギリヤネ with オープンスペース

そのノコギリヤネは、みちが二股に分かれるその分岐点に佇んでいた。多くの人が、ものが出会い、分岐していく。エネルギーが集まってくる場所である。みちは、まち（町）、いち（市）に通じるものである。

そのノコギリヤネは、多くの仲間たちを見送ってきた。一棟、また一棟と取り壊されていった。明日はわが身か。そしてみんな居なくなってしまうのか。仲間たちの墓場は、いまはひろばとなり、子どもたちの声が響き、いのちが走り回る。生々流転。何もないところから、新しいものが生まれてくる。

そのノコギリヤネは、田んぼを背にして立っている。自分が立っているこの場所も田んぼだった。この土地は氾濫する木曽川から生まれたものだ。そして、コウバだった自分は、いまはこのイエの記憶の眠る物置だ。このノコギリヤネが開かれる時が来るだろうか。あるいは、元の大地に戻るのだろうか。

ノコギリヤネもオープンスペースから生まれた。そして、いまでも傍らにはオープンスペースがある。ノコギリヤネ with オープンスペース。ここから、新しい物語が始まる。それは、仲間との対話、小さなビジネス、あるいは……。未知（みち）であり、待ち（まち）である。



▲起ノコギリヤネ with オープンスペース（第6回のご座『のこぎりマッピング』写真をコラージュ）



## 8. 起の大地から始まる「オワリ」の未来

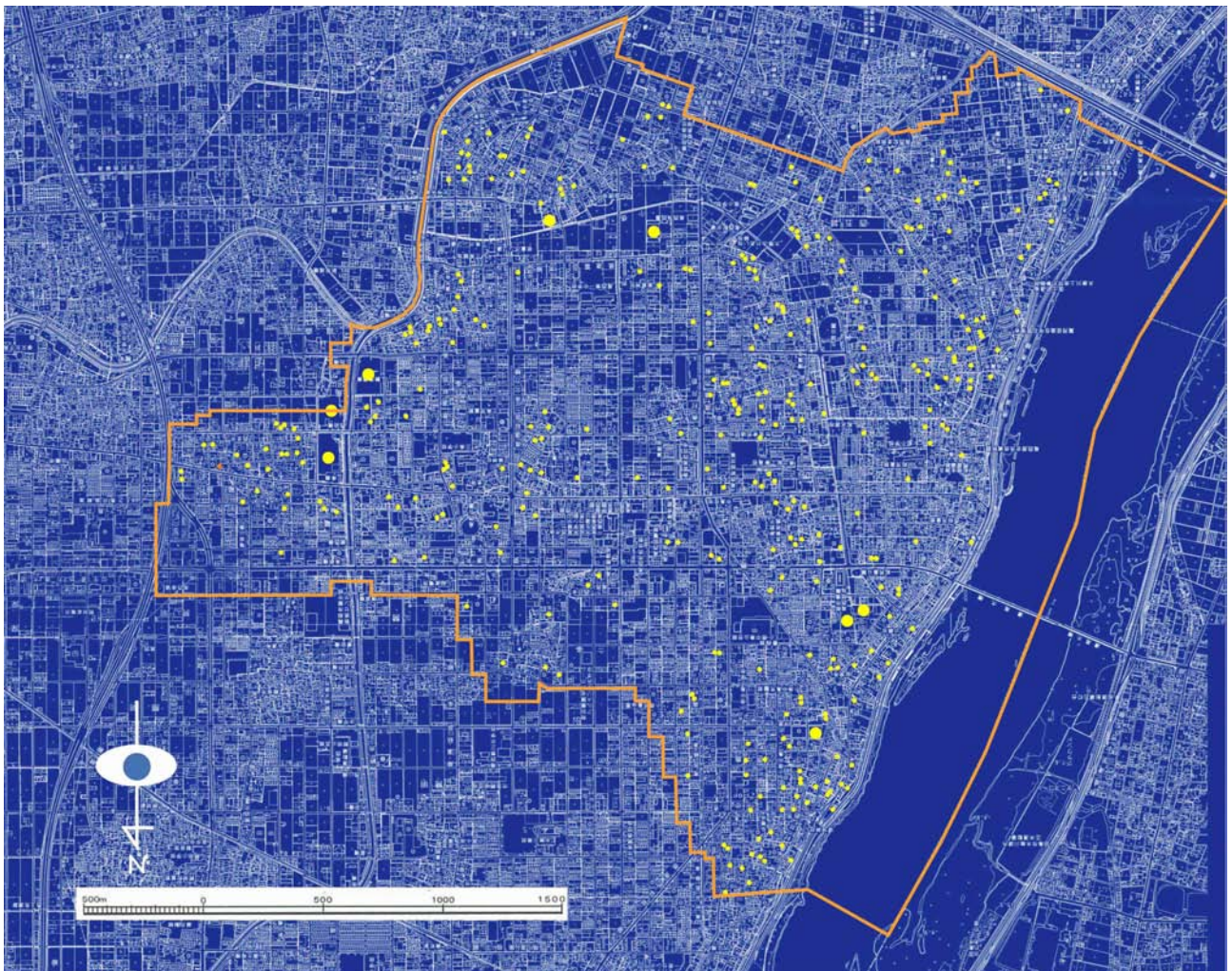
起地区の夜間飛行を試みた。北の空から眺めると、ノコギリヤネの窓がこちらを向いて並ぶ。

ノコギリヤネが白く浮かんで見えてきた。闇の中にオープンスペースが沈んでいる。木曽川が横たわる。日光川、野府川の流れ。そして、田んぼや畑、学校の校庭などが見える。駐車場も多い。ノコギリヤネの窓で何やら蠢いて見えるものがある。オニたちだろうか。

かつて乱流していた木曽川。その自然堤防の上に人々が住み始め、神々を祀り、自然を畏れ、恵みを敬う農村共同体が形成された。その後、その共同体は、わずか30、40年前まで機業コミュニティというカタチで繁栄を極めていたが、元に戻ることはない。

しかし、「のこぎり二」に始まった振動が、新たな「起」の始まる予感がする。それは、木曽川の流れがつくった尾張の大地を通して、多くのノコギリヤネに伝わっていくだろう。そして、農村共同体とは異なる「共同社会」の震源地となる。家族のカタチも変わっていく。そして、オニは「ヨソモノ（他所者）」ではなく、未来を共に築く“マレビト（稀人）”となる。

あたり一面が青い光に包まれた。これが、夜明け前のブルーモーメントだろうか。「オワリ」の未来が、ここ「起」の大地から始まろうとしている。



▲「起物語」の夜明け前



## ○エピローグ

吉田初三郎の描く鳥瞰図は、一宮で生まれ育ってきた人には奇異に映るかもしれない。背後に岐阜金華山から犬山本宮山に連なる丘陵地、周りに木曽川を配置する構図は風水思想のような安心感に通じるものがあるが、濃尾平野の真ん中に居て、山懷に抱かれた印象は持ちにくい。

知り合いの景観学者から、鎌倉の谷戸（丘陵地が侵食されて形成された谷状の地形）の自然環境の中で生まれ育ち、後年、名古屋で暮らした時、不安感を抱いたと聞いたことがある。一宮で生まれ育ち、現在、藤沢で暮らすワタシと正反対の景観体験である。

尾張の大地は、この平坦な地形に加えて、度重なる木曽川の氾濫の中で形成されてきた。ワタシたちの祖先は、この不安定な環境の中で、自然堤防の上に村をつくり、生きてきた。その共同体で、農業の副業として機織が広がり定着していった。明治時代の地図には、いくつもの村々が適度な間隔を取りながら尾張という地域をつくってきた姿を見ることができる。

図らずも、いまワタシたちは、生活の中での新たな関係性を問われている。ソーシャル・ディスタンスという言葉によって、家族、友人、会社など、既存のコミュニティにおける関係性を再認識することになった。これまでの都市、まちは、まさに密集・密接・密閉空間を創造することだったかもしれない。

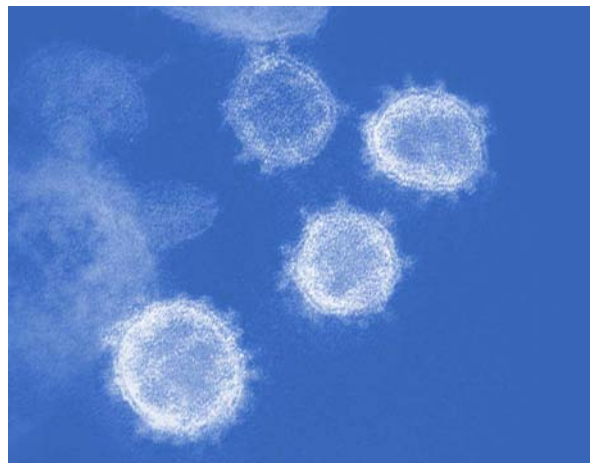
コロナウイルスは、現代社会に現れたオニかもしれない。ワタシたちの社会は、この先、どう異物との共存を図っていくのだろう。

吉田初三郎の描いた時代の新しい希望は「観光」であった。「勘考」という同音の言葉がある。「ブリコラージュ」に相当するこの地方独自の言葉がないかと考えていた時、この言葉を聞いた。オワリの未来は、尾張の言葉で語る中から見えてくるのかもしれない。

始まりは、「カラスとトンビ」の寓話であった。若い人たちには、ガチャ万の呪縛はない。ノコギリヤネは「勘考地」となる。そして、創造の発信地となる。

そこに、新たな「起業」を期待したい。業は「わざ」と読めば、「起業（きわざ）」は、「仕事」だけでなく、「技／アート」を起こすものとなる。

2020.6.24



▲ コロナ・ブルー？ ソーシャル・ディスタンス？